2025 明 海 大 学

「大学と地域連携の未来」シンポジウム

こどもまんなか社会へ　大学と地域がつなぐ未来の絆

実施報告書

2025年３月

主催：明海大学 教職課程センター・地域学校教育センター
後援：千葉県教育委員会、東京都教育委員会、足立区教育委員会、浦安市教育委員会、時事通信出版局、日本教育新聞社、（財）きょういく創造育成財団

目次

1. 巻頭言・感謝の辞 2

2. 当日のプログラム 3

3. 参加状況 4

4. 基調講演
「こども大綱」が目指す「こどもまんなか社会」の実現に向けて
大谷　美紀子（弁護士／国連子どもの権利委員） ... 5

5. 学生発表（大学生による日本語指導支援） １０

6. 学生発表（留学生等による児童・生徒との交流） １３

7. 学生発表（大学生による学習支援） １７

8. パネルディスカッション
こどもまんなか社会へ　大学と地域がつなぐ未来の絆 ２４

9. アンケート ２８

10. 2024 年度 METTS 事業参加学生一覧 ３１

１．巻頭言・感謝の辞

明海大学　学長　中嶌　裕

本日は、2025 年「大学と地域連携の未来」シンポジウムにご参加いただき有難うございます。本シンポジウムは、地域学校教育センターの活動の一環として 2017 年より開始され、今年で第９回目となります。

このシンポジウムでは、明海大学の地域連携活動を教育関係者や地域の皆様にご紹介するとともに、学生による発表や参加を促すことで、将来、教員としての資質・能力の育成を図ることをねらいとしております。今回は、現在、国を挙げて取り組んでおります「こどもまんなか社会」をテーマに、その中で「こどもまんなか社会へ　大学と地域がつなぐ未来の絆」を取り上げることとしました。

ご存知のように、現在、社会状況のみならず様々な課題が学校や子供たちを取り巻いております。このような状況を踏まえ、解決に向けてシンポジウムを機に大学としての在り方あるいはその方向性について、教育関係者や地域の皆様とともに考える場といたしたいと存じます。

今回、基調講演には、国連子どもの権利委員会委員であります弁護士の大谷美紀子先生にご講演をお願いしております。先生におかれましては、大変ご多忙の中、本日は海外からオンラインでのご講演をいただくことになっております。さらに今回のシンポジウムでは、本学学生や教職員等が実施した小中高等学校における支援や実践について、学生の発表を核にしながら紹介させていただきます。

学生の活動の幅が大学内にとどまらず、地域や学校など、大学の外で様々な体験・経験を得る機会となっており、学生自身の成長や将来展望について考える非常に貴重な機会になると考えております。本学の学生がこのように様々な場所でお世話になり、学修の機会をいただいていることに対しまして大学側として心から感謝申し上げます。

さらに後半のパネルディスカッションでは、教育連携をしております東京都立南葛飾高等学校の伊達﨑広校長先生、足立区教育委員会学力定着推進課の川瀬穣統括指導主事様にご登壇いただくほか、昨年４月より開校いたしました不登校対応の私立中学校・東京みらい中学校の定野司校長先生にもパネリストとして参加をお願いしております。

最後になりますが、本日はご多用にも関わらず、教育連携を締結しております東京都足立区教育委員会教育長の中村明慶様、千葉県浦安市教育委員会教育長の船橋紀美江様にご挨拶を頂戴することに厚く御礼申し上げます。

本シンポジウムが新たな時代における小中高等学校・大学教育の発展に寄与し、地域連携の未来をさらに広げてくれることを期待して、ご挨拶とさせていただきます。

2025 年２月８日

２．当日のプログラム

1　シンポジウムタイトル：

2025 明海大学「大学と地域連携の未来」シンポジウム

こどもまんなか社会へ　大学と地域がつなぐ未来の絆

2　開催日時、会場（※対面とオンラインのハイブリッド開催）：

【開催日時】2025 年２月８日（土）12：30〜16：40（受付開始：12：00）

【会場】 2206 大講義室

3　タイムスケジュール

時間	内容
12:30	司会：吉野　青空　（明海大学外国語学部日本語学科４年） 磯崎　陽翔　（明海大学外国語学部日本語学科４年） 鈴木　凜果　（明海大学外国語学部日本語学科４年）
	【開会式】
	【学長挨拶】 中嶌　裕（明海大学 学長）
	【足立区教育委員会 教育長 挨拶】 中村　明慶
	【浦安市教育委員会 教育長 挨拶】※ビデオメッセージ 船橋　紀美江
12:40	**【基調講演】「こども大綱」が目指す「こどもまんなか社会」の実現に向けて** 大谷　美紀子　　弁護士／国連子どもの権利委員 ※リモートでの講演
13:40	**休憩**

学生発表	
13：50	**【グループ A】　大学生による日本語指導支援** チン　ヴァン　コン（大学院応用言語学研究科 博士前期課程１年） 紀　美　（大学院応用言語学研究科 博士前期課程１年） 姜　チョウ健　（大学院応用言語学研究科 博士前期課程１年）
	【グループ B】　留学生等による児童・生徒との交流 布施　名菜／冨樫　美智雄／大野　杏里／中川　なさり／ クエンカ　ダイアン　ニコル　バレンシア　（外国語学部英米語学科４年） 大沢　和心　（外国語学部英米語学科３年） 大塚　翼夢　（外国語学部英米語学科２年）
	【グループ C】　大学生による学習支援 森岡　凜／仲田　未羽／高木　由紀／小川　翔太郎／吉澤　阿門 （外国語学部英米語学科４年） 花澤　真彩／霜方　柚奈／知念　咲花／大場　伊織　（外国語学部英米語学科３年） 三島　茉姫／江尻　智佳／比嘉　彩夏　（外国語学部日本語学科３年）
15：25	**休憩**

時間	内容
15：30	【パネルディスカッション】 こどもまんなか社会へ　大学と地域がつなぐ未来の絆 パネリスト 定野　　司　（東京みらい中学校 校長） 川瀬　　穣　（東京都足立区教育委員会 統括指導主事） 伊達﨑　広　（東京都立南葛飾高等学校 校長） 池内　夏美　（明海大学外国語学部英米語学科４年） 安田　結貴　（明海大学外国語学部英米語学科４年） コーディネーター 山本　聖志　（明海大学地域学校教育センター 教授）
16：35	【閉会式】 【閉会挨拶】 藤井　大輔（明海大学教職課程センター・地域学校教育センター センター長）

３．参加状況

教員（小学校・中学校・高等学校・大学等）	23
教育委員会	22
学生・大学院生	124
地域住民	2
マスコミ	0
その他	9
計	180

４．基 調 講 演

「こども大綱」が目指す
「こどもまんなか社会」の実現に向けて

大谷　美紀子（弁護士／国連子どもの権利委員）
※リモートでの講演

記録の詳細についてはこちらをご覧ください⇒

― 講演内容（発言の趣旨を踏まえた要約版）

◆はじめに

皆さん、こんにちは。ただいま御紹介に与りました大谷です。本日は、スイスのジュネーブから、子どもを真ん中に据えた社会のあり方についてお話しする。私は国連子どもの権利委員会の委員として活動しており、この委員会の役割とともに、日本における子どもの権利の現状についても説明したい。

子どもの権利条約について、日本では認知度が低く、詳細を知る人も少ない。条約は国連が制定したものである。国連は国際連合のことだが、その前身に国際連盟があった。国際連合は、第一次世界大戦が終わった後に、またこのような大戦が起きないようにしよう、起きた時にちゃんと武力や戦争ではなく解決できるようにしよう、ということでできた国際機関である。1924 年に、国連の前身である国際連盟がジュネーブ宣言を定めた。これは戦争孤児や貧困に苦しむ子どもを守るために国際連盟が採択したものだった。100 年前のことである。

しかし、国際連盟は第二次世界大戦を防げず、1945 年に国際連合が発足した。戦争をなくし、人権を守ることが目的とされ、今年で 80 年になる。国際連盟は紛争が起きたら調整して紛争を解決する、武力が使われないようにする、という目的をもつが、国際連合は、紛争が起きないようにするために、国と国同士がぶつかったときに仲裁に入ったり、安全保障理事会が決議したりするのでは遅いので、第二次世界大戦時にドイツや日本がもっていたような優越思想をなくす、人間の間での差別をなくす、そして一人一人の人権が守られるような社会を築いていかなければならない、ということを掲げた。

もう一つは国の間の格差の問題。今でも豊かな国とそうでない国がある。社会的なインフラが進んでいれば、例えば子どもたちはほぼ 100%学校に行けるが、そうでない国もある。やはり経済的・社会的な格差が世界で緊張関係を生み、戦争につながる恐れがある。そこで、最終的には平和を目指すが、国連は「開発」という目的を掲げた。平和のために人権が守られるようにする、世界中の貧困をなくして格差をなくしていく「開発」を目的とした。実際には、世界中のどこで生まれてもどんな人でも同じように人権が守られるということを目指した。国連は、それを世界中で合意する「世界人権宣言」を作った。

この「世界人権宣言」ができた後、国が法律的に守らなければならない条約を作っていくが、その一つが「子どもの権利条約」で、1989 年 11 月 20 日、国連総会で採択された。国連は人類の議会と言われるが、本当の意味での法律を作る国会ではないので、国連総会で条約を作っても、それを批准するかどうかは国が決めるものである。批准した国は法的に条約を守らなければならないが、批准しなかった国にとってはそのような法的拘束力がない。多くの国が、この「子どもの権利条約」を次々に批准した。国連が作った条約の中でも珍しく、現在、アメリカを除く世界のすべての国が批准している。世界中の人たちが子どもを守ること、子どもの権利を守らなければならないということに、多くの国々が賛成した。

日本は 1994 年に批准した。日本の批准はかなり遅く、条約ができてから約 4 年半かかり、世界で 158 番目だった。

なぜ遅かったのか。日本では、この条約が武力紛争や感染病で子どもの死亡率が高い貧しい国のためのものだという受け止め方があった。また、当時の日本の学校では非常に教育現場が荒れていて、条約を批准したら、子どもたちがさらにわがままになり、自己主張が強くなって、教員がもっと困るのではないか、という懸念があった。この条約がどういうものかは、外務省や日本ユニセフ協会のホームページなどでもみられるが、今日はポイントをお話する。日本では子ども政策が少子化対策に偏り、個々の権利保障への意識が薄い。条約の本質を理解し、子どもたちが健全に成長できる環境を整備することが求められる。

◆子どもの権利条約とその意義

国連子どもの権利委員会は、1989年に採択された子どもの権利条約に基づいて各国の取り組みを監視し、勧告を行っている。子どもの権利条約は、子どもを一人の人間として尊重し、彼らの意見を社会に反映することを目的としている。

条約の前身には1924年のジュネーブ宣言や1959年の国連子どもの権利宣言があるが、これらは子どもを「保護すべき存在」として捉えていた。

子どもは弱い存在で、未熟で未発達で、大人が守らなければならない存在である。だから子どもは大人の言うことを聞かなくてはいけない、つまり大人が子どもに対して責任を負っているのだから、何が一番いいか考え、決めるのは大人だ、ということにつながった。1989年までは世界中でこのような考え方が主流だった。

ところが、10年以上かけて、国連で国々が集まり、NGOからも色々な意見が出て議論する中、子どもについての考え方が大きく変わった。確かに子どもは未熟で、特に乳幼児は一人で自分の命も守れない、大人がしっかりと守らなければいけない。だから「子どもが身体的にも精神的にも未熟である」ということは事実である。

しかし、子どもも18歳まで日々成長している。未熟、未発達と言っても年齢や発達状態によって違う。子どもが未熟で未発達だから大人が守らなければいけないという大人の責任の話とは別に、人間と言う観点では、子どもも大人も同じで、同じ価値をもっている。そこが、子ども権利条約の一番大事なことである。

この条約は、子どもを、権利をもつ主体として位置付けた点が画期的である。

この条約は人権のことについて書かれている。子どものための人権条約である。子どもが一人の人間として、大人と同じ価値をもっている人間だから人権がある、その意味では子どもも大人も変わらない、ということである。

条約の採択以降、各国はそれを国内法に取り入れる努力を進めてきた。日本も1994年に批准し、子どもの権利を保護するためのさまざまな施策を実施してきた。

しかし、子どもの権利条約の理念が十分に浸透しているとは言えず、多くの人がその具体的な内容を知らないのが現状である。

◆日本の取り組みと課題

日本では、子どもの権利条約を1989年に批准して以降、私が関わっている子どもの権利委員会から4回審査を受けた。最近では2019年に審査を受けている。その間にも色々な勧告を受けて、色々な面が進んできたが、何回もの勧告にも関わらず、その中のいくつかは実現しなかった。その一つが、子どもに関する総合的な法律を作るように、という勧告である。条約は守っている、民法や少年法、学校教育法、児童虐待防止法、児童福祉法でも条約に書いてあることは色々な法律で守っている、というのが日本の立場だった。しかし、委員会は長年にわたり「子どもに関する総合法を作るように」勧告した。その結果できたのが「こども基本法」であり「こども大綱」である。「こども基本法」は、子どもの権利を包括的に保障することを目的とした法律であり、教育、福祉、健康など幅広い分野にわたる。この法律に基づき策定された「こども大綱」では、具体的な施策が定められ、子どもを社会の中心に据えるための方針が示されている。しかし、法律の制定だけでは十分ではない。社会全体が子どもを一人の人格として尊重し、彼らの意見を聞く文化を醸成する必要がある。特に、子どもの意見を聞き、それを政策や教育現場に反映させる仕組みの整備が求められる。

◆「こども基本法」の重要性

先述した子どもの権利条約の考え方は、子どもは未熟かもしれないが、一人の人格をもった人間としての尊厳ある存在として接しなくてはいけない、子どもに関することを決める時には子どもの最善の利益を一番大事にしなければならない、というものである。最終的に大人が決めるにしても、子どもにとって何が一番いいかを考えなければいけない。子どもに聞かなくてはいけない。子どもに聞く、と言っても、子どもが言った通りに決めるという意味ではない。自己決定権ではなく、意見表明権である。意見というのも広い意味で、子どもが考えていること、望んでいること、感じていることである。年齢がかなり低い子どもも含めて、子どもの受け止め方なども聞き出して、それらを含めて子どもにとって何が一番いいかということを決めなければならない。また、子どもは0歳から18歳まで、様々な子どもがいる。権利条約では、

多様な子どもたちの間に差別があってはならない、ということが柱になっている。子どもは発達し、18 年間で人生の基盤を作っている。この間に子どもたちが作った土台が将来、その子どもの人間関係や能力の発揮など、色々なことの土台になる。18 年間に身体的にも精神的にも子どもが発達するということは、18 年間がとても重大だということである。こうしたことは、民法や児童福祉法や学校教育法に書いてあるが、子どもの権利条約ができて、子どもに関してはこの考え方でいかなければならない、と決めたことは、これらのパッチワークの法律ではなかなか浸透しない。そのために、子どもの権利委員会は、総合法が必要だ、と勧告してきた。子どもの最善の利益、子どもの意見表明権、子どもが意見を聞かれる権利、差別をしない、発達が重要である、そうした考え方を踏まえて、子どもに関することはすべてに行きわたるように、という意味で、総合法が必要である、と子どもの権利委員会は言ってきた。

◆こどもまん中社会の実現に向けて–

子どもは今、世界人口の 3 分の 1 未満を占める。我々は元々は子どもで、皆子ども時代を通ってきているが、人生の土台を作る 18 年間はとても大事な時期である。それでも子どもたちには選挙権がない国がほとんどである。条約ができて 35 年経ったが、やはり子どもはまだ一人前でないから、子どもの意見は聞かなくていい、とどこかで思っている。そうではない。国連は、世界中の人たちにとって平和、人権、開発の実現と貧困をなくすために動いている。そこに、子どもたちが置かれている立場や現実、直面している課題、子供たちの声といったものをきちんと取り入れて反映させていかなければならない。どんな政策も結局は子どもに影響がある、という観点から物事を決めていかなければならない。今、日本でキーワードになっている「こどもまんなか社会」は、国連が言う、「子どもの権利の主流化（Child Rights Mainstreaming）」と同じ考え方であると思うし、同じ考え方にしていかなければいけないと考える。この社会を形成している重要な人たちの中に子どもという集団がいる。この子どもが大人になって社会を形成していく。子どもたちは今を生きていて、将来の社会を作る。18 年経てば大人として社会の位置に立つのであるから、この 18 年がどういうものであるか、子どもたちがどのように扱われるかが、社会形成にとってとても重要である。

子どもは一人の人格をもった人間である、尊厳をもっている人間である、そういう意味では我々と対等である、人間として対等であると、一人一人が思えることが大事である。社会の一員として、家族の一員として、学校での立場の違いや力関係は違うが、人間としては対等である、だから子どもたちの言うことに耳を傾けて、子どもたちの意見を聞いて反映させることをやる責任が、我々にはある。子どもたちも、親や兄弟、友達や先生に対して、人間として尊敬する、尊重するという接し方を学ぶ必要がある。子どもが人権を尊重する、男女の平等等色々な人の違いを尊重する、多様性を尊重する、そういったことを学ぶことが教育の目的であると書いてある。家庭においては親のふるまい、親の子どもへの接し方から子どもたちは吸収する。学校においては、日々の先生の子どもたちへの接し方や、色々なルールの作り方、学級でのルールの作り方、校則の在り方、学校運営の仕方、そういうところから子どもたちは人権というものを自然に身に付けていく。そして地域社会が子どもたちをどう扱っているか、子供たちを大切にしているか、地域社会の一員として受け入れられているか、認められているか、そういうことから子どもたちは日々学んでいる。そしてオンラインからも多くの影響を受けている。

◆おわりに

明海大学が地域との連携協定を作ったことはすごいことだと思う。大学は学問的に重要なだけでなく、地域と連携して家庭や市民と学校をつないだり、ハブとしての大きな役割を担ったりしている。そこで学ぶ教職課程の学生は重要な役割を担っている。国連子どもの権利委員会は、すべての国に、子どもの人権教育を学校のカリキュラムで必須にすること、そして教員養成課程に子どもの権利条約を入れるよう勧告している。学校の先生たちも日々大変で忙しいから、先生たちを支えていかなければならない。それは国の責任であるということを、国連子どもの権利委員会が言っているということを最後に伝えて終わりにする。ご清聴、大変にありがとうございました。

■ 学 生 発 表

5．大学生による日本語指導支援
6．留学生等による児童・生徒との交流
7．大学生による学習支援

記録の詳細についてはこちらをご覧ください⇒

５．学生発表（大学生による日本語指導支援）

日本語指導支援（東京都立飛鳥高等学校）		
参加学生	全日制課程	応用言語学研究科博士前期課程１年 チン　ヴァン　コン
	定時制課程	応用言語学研究科博士前期課程２年 田中　愛唯 日本語学科３年 呉　トウドン

１．はじめに

本事業は、本学と高大連携協定を締結している東京都立飛鳥高等学校において、日本語指導が必要な外国人生徒に対して、外国語学部日本語学科及び応用言語学研究科の学生・院生が行った日本語指導支援である。その支援活動についてシンポジウムで発表した内容を以下にまとめる。

２．実施概要

（１）　実施回数：前学期５回、後学期 12 回

（２）　対象生徒数：４名（上級レベル）

（３）　指導支援目的：

①文法力と読解力を向上させる

②論理的な意見の表現力を養う

③大学進学後に必要な日本語力を身に付ける

３．授業概要

（１）　使用教材：

生徒のニーズと日本語レベルに応じて教材を変更し前学期と後学期で異なるアプローチを行った。

前学期：『TRY!日本語能力試験Ｎ２：文法から伸ばす日本語』、後学期：『話す・書くにつながる日本語読解　中上級』

右に活用している語彙リストと文法リストを掲載する。

（２）　授業の流れ

＜前学期＞

本文：　①ウォーミングアップ
②読み、精読
③内容確認

文法項目の確認：　①どう使う？
②例文確認
③やってみよう！

まとめの問題

＜後学期＞

①目標提示

②話してみよう

③音読

④本文の内容確認

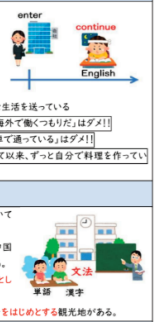
⑤発展（ペアで話合い、まとめ、表現する）

語彙リスト　飛鳥全日_2024年６月17日

2. 転任のあいさつ　【スピーチをする】		
日本語	中国語版	英語版
本文		
転任（する）	轉任，調職	change of post (to change one's post)
命じる	命令，要求	to appoint, assign, order
9. 入社して以来		
遺伝子	遺傳基因	gene
10. 部長をはじめ		
歓迎会	歡迎會	welcome party
見直す	重新考慮，重新審視	to review, reconsider
スパイス	香料	spice
電子レンジ	微波爐	microwave oven
ジャケット	夾克，外套	jacket
入荷（する）	進貨；到貨	arrival, receipt (to arrive, receive)

文法リスト　飛鳥全日_2024年６月17日

2. 転任のあいさつ　【スピーチをする】		
❶～て以来		
意味	～してから、今までずっと。 ・「ずっと～」「～ている」「～ていない」など継続を表す言葉とともに使われることが多い。	① 会社に入って以来、英語の勉強を続けている。 ② 学校を卒業して以来、田中さんとは一度も会っていません ③ 一人暮らしを始めて以来、ずっと外食が続いている。 ④ 先月定年退職して以来、悠々自適な生活を送っている × 未来文 …「大学を卒業して以来、海外で働くつもりだ」はダメ!! × 近い過去…「先週車を買って以来、車で通っている」はダメ!! ○ 遠い過去…「2000年に日本へ来て以来、ずっと自分で料理を作っている。」
接続	Vて　＋以来 N　＋以来	
❷～をはじめ		
意味	～を代表例として、その他にも	① 学校で文法をはじめ日本語について色々勉強した。 ② 日本に来ている外国人の国籍は中国をはじめ、韓国やベトナムなどがいる。 ③ 日本にはディズニーランドをはじめとして、多くの遊園地がありますね。 ④ 東京には、東京タワーやスカイツリーをはじめとする観光地がある。
接続	N＋をはじめ N＋をはじめとして N＋をはじめとする＋N	



４．課題と考察

生徒ごとに学習進度が異なり、全員に合わせた指導が難しい。また、授業に集中しない一部の生徒に対して動機付けを高める工夫が必要である。

さらに、話す機会をより増やすことで理解が深まることや、生徒同士が助け合える環境を作ることで、より効果的な学びが得られると考えられる。

日本語指導支援（東京都立南葛飾高等学校）

参加学生	応用言語学研究科博士後期課程２年　沈　伽迪 応用言語学研究科博士前期課程１年　姜　チョウ健 外国語学部日本語学科　４年　竹澤　佳祐 ３年　竹澤　佳祐、石橋　聡史、古川　ゆら、孫　瑩超

１．はじめに

本事業は、本学と高大連携協定を締結している東京都立南葛飾高等学校において、日本語指導が必要な外国人生徒に対して、外国語学部日本語学科及び応用言語学研究科の学生・院生が行った日本語指導支援である。その支援活動について、シンポジウムで発表した内容を以下にまとめる。

２．実施概要

（１）実施回数：前学期 16 回（夏季講習を含む）
　　後学期 26 回

（２）対象生徒数：18 人
　　（内訳）N２クラス 10 人、N３クラス８人

（３）使用教材：
　　生徒の学習ペースが速いため、前学期と後学期で複数の読解教材を使用した。

① N２クラス

・前学期：
『新完全マスター読解　日本語能力試験 N２』

・後学期：
『話す・書くにつながる日本語読解　中級』
『中上級学習者のための日本語読解のワークブック』

② N３クラス

・前学期：
『新完全マスター読解　日本語能力試験 N３』

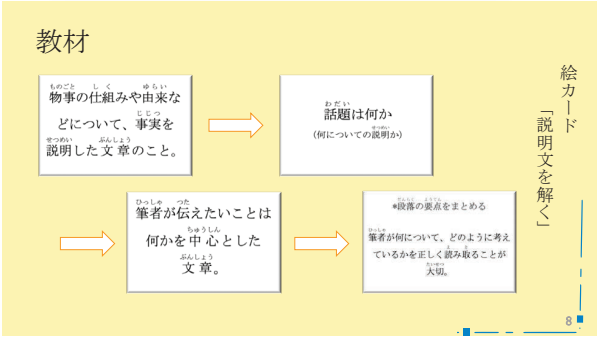
・後学期：
『話す・書くにつながる日本語読解　初中級』
『日本語能力試験文章の文法・読解 N３　初中級』

３．指導の目的

日本の高校に相応しい読解力を身に付けることを目的として、読解指導を中心に行うとともに、日本語能力試験（JLPT）の読解項目をクリアできる能力を身に付けられるよう指導した。

以下に、使用教材を紹介する。

単語	イラスト	意味
とあみ 投網	川や海で魚を捕るために使う大きな網である。	中国語：撒网 英語：casting net
例文：おじいさんは川で投網を使って魚を捕まえました。		
ちょうさ 調査	物事の状態や内容を詳しく調べること。	中国語：调查 英語：research
例文：警察は事件の調査を進めています。		
よかん 予感	何かが起こりそうだと感じること。	中国語：预感 英語：foreboding
例文：今日はいいことが起こりそうな予感がします。		
か 飼う	動物を世話して育てること。	中国語：饲养 英語：to keep as a pet
例文：私は犬を飼っています。		
はな 放す	つかまえているものを自由にする。	中国語：放生 英語：to release
例文：捕まえた魚を放してあげました。		
はっけん 発見	まだ知られていない物事を見つけること。	中国語：发现 英語：to discover
例文：図書館で面白い本を発見しました。		



４．課題等

ヒントを出さないと正答率が６割程度に留まるが、集中するとほとんどの問題に正解する。読み書きが苦手な生徒が多く、特に非漢字圏の生徒の漢字習得が難しい。語彙リストで多くの語彙を示すことで、授業が進めやすくなる。そのため、一方的な説明ではなく、生徒とのやり取りを取り入れることが重要である。

日本語指導は易しいことではないが、学習者の視点や疑問を共有することで、日本語の魅力や難しさをあらためて実感するとともに、文化や言葉の多様性について考えを深めることができた。この指導支援経験を通じて、単に言語を教えるだけでなく、相互に学び合う関係を築くことの重要性を強く感じた。

日本語指導支援（東京都立竹台高等学校）

参加学生	応用言語学研究科博士前期課程１年　紀　美

１．はじめに

本事業は、本学と高大連携協定を締結している東京都立竹台高等学校において、日本語指導が必要な外国人生徒に対して、外国語学部日本語学科及び応用言語学研究科の学生・院生が行った日本語指導支援である。その支援活動についてシンポジウムで発表した内容を以下にまとめる。

２．実施概要

（１）　実施期間・回数：

2024 年９月～12 月、８回／各回 60 分

（２）　対象生徒数：高校３年１名

（N５-N４レベル）

（３）　使用教材：

ア　『実践日本語シリーズ　名詞（初・中級）』

イ　『実践日本語シリーズ　動詞（初・中級）』

ウ　『実践日本語シリーズ　慣用句（初・中級）』

エ　『実践日本語シリーズ　形容詞（初・中級）』

オ　『どんなときどう使う　日本語表現文型 200　初級～中級』

３．指導の目的

上記の教材を通じて、生徒が日常生活や学校で日本語を自然に使えるようになることを目指した。

①文法と表現力の習得：上記オの教材を活用して、よく使われる文型や表現を学び、適切な状況で使用できる力を育成した。

②語彙力の向上：上記アとイの教材を通じて、トピックごとに関連する単語や表現を効果的に習得し、幅広い場面で応用できる語彙力を身に付けさせた。

③総合的な日本語能力の向上：読解、作文、会話、リスニングの各スキルをバランスよく向上させ、生徒が N４レベルの知識をより深く理解し、実践的に使えるように指導した。

④実践的な日本語の練習：授業中は、生徒が自ら考えて話す時間を増やし、学んだ内容を会話や作文に取り入れることで、日本語を実際に使う場面を意識させた。

全体を通して、限られた時間内で、生徒の個性や学習ペースに合わせた丁寧な指導を心がけた。

以下に指導に活用している教材を紹介する。

語彙リスト			
技術力		例文： 私たちはお互いに技術力を向上させる。	中国語：技术力 英語：technology
まじめ		例文： 私が真面目に言っても、彼は信じない。	中国語：认真 英語：true colors
輸出 対：輸入		例文： 海外にコンピューターを輸出する。	中国語：海外输出 英語：export
利益		例文： 今年、景気が悪くて利益がない。	中国語：利益 英語：Benefit
資源		例文： 木材が資源の再生利用を進めます。	中国語：资源 英語：resource
マイナス 対：プラス		例文： 間違いがあって、点数が、２点マイナスされた。	中国語：负，消极 英語：minus
必ずしも～ない	意味： いつでも～でもない。 全部が～ではない。	例文： 安いものを買うことが必ずしも悪いとは言えない。	中国語：未必，不一定 英語：not necessarily
育つ（自） 育てる（他）		例文： 私は花が育っている。	中国語：培养，培育 英語：growing up

４．課題等

対象生徒が一人であるため、集中して生徒の反応に直接向き合うことが必要である。そのため、生徒が消極的な場面では、一方的に説明するのではなく、生徒が積極的に参加できるよう工夫している。

生徒が質問しやすい雰囲気を作ることが重要で、そのことにより授業がより充実したものになる。また、自分自身が日本語を学んできた経験を生かして、学習者の気持ちに寄り添った指導支援を行うことができることが強みであると考える。

６．学生発表（留学生等による児童・生徒との交流）

明海大学あけみ英語村 2024－小学生異文化交流プロジェクト－

第１回	日時	2024 年 10 月８日（火）12 時～16 時
	参加者	足立区立千寿双葉小学校　５年生 85 名、本学留学生・教職課程履修生 70 名、教職課程センター及び多言語コミュニケーションセンター、足立区教育委員会
第２回	日時	2024 年 11 月 12 日（火）12 時～16 時
	参加者	足立区立中川東小学校　６年生 50 名、本学留学生・教職課程履修生 70 名、教職課程センター及び多言語コミュニケーションセンター、足立区教育委員会

１．はじめに

世界のさまざまな国・地域から来ている本学の留学生及び教職課程履修生と足立区の小学生とが英語を使って異文化交流する「明海大学あけみ英語村」は、今年度で８年目の取組みとなった。

今年度も２回実施することができた。

２．プログラム

（１）　開村式
（２）　グループミーティング
（３）　イングリッシュ・キャンパス・ツアー
（４）　パトリツィア教授とタイソン准教授によるコミュニケーション・アクティビティ
（５）　閉村式

３．主なアクティビティの特徴

（１）　イングリッシュ・キャンパス・ツアー

グループミーティングで全員が自己紹介をしたり、留学生による母国紹介を聞いたりしてお互いに打ち解けあった後、キャンパス・ツアーをおこなった。ツアー中のやりとりは全て英語でおこなわれ、学生や留学生は図書館のラーニング・コモンズやイングリッシュ・ゾーン、学食、テニスコートなどを案内して回った。

（２）　コミュニケーション・アクティビティ

アメリカ出身のパトリツィア先生とカナダ出身のタイソン先生がコミュニケーションのモデルを紹介した。そのモデルを参考に小学生と留学生、大学生がペアやグループになって夏休みの経験や身近な話題について英語でやり取りをおこなった。うまく回答できると大学生からシールをもらい、小学生は英語のコミュニケーションを楽しみながらいっぱいシールを集めることができた。

４．シンポジウムでの学生発表の概要

本シンポジウムでは英米語学科４年 布施　名菜と冨樫 美智雄が発表した。

＜経験できたこと（一部抜粋）＞

布施：

来る４月から千葉県公立中学校での英語教員になる私としては、「あけみ英語村」で小学生と触れ合えたことは貴重な機会であり、大きな経験となりました。小学生と関わることで小学校段階の英語教育の実情を知ることができました。特に、小学校高学年の児童と関わったため、中学進学に向けた外国語活動、英語教育の実情を知り、新たな子供との関わり方や英語の教え方を学びました。

冨樫：

中国と日本、両方の背景を持っているため、今回留学生として活動に参加し、自国の文化を紹介したりして児童の興味を引く工夫をしました。英語を「学ぶもの」ではなく「楽しむもの」と感じてもらうためゲームを取り入れ、児童が主体的に英語を考え使う場面を増やしました。

「英語がわかった！」という成功体験を得やすくし、積極的な発言を促しました。児童への適切なリアクションとフィードバックも大切にしました。

中学生との異文化交流会

今年度参加校	足立区立扇中学校	実施日	2024年 7月 10日
	足立区立谷中中学校	実施日	2024年10月 16日
	足立区立花畑中学校	実施日	2024年12月 13日
	足立区立栗島中学校	実施日	2025年 1月 31日

はじめに

足立区と連携協定を締結した 2016 年度より、足立区教育委員会と連携して小中学校に対して本学の研究・教育資源を生かした英語教育支援をおこなってきた。その一環として、世界のさまざまな国・地域から来ている本学留学生が足立区立中学校で異文化交流会をおこなってきた。
今年度は、異文化交流学習会を４校で開催することができた。

シンポジウムでは、英米語学科４年 大野杏里と中川なさりが発表した。

＜シンポジウムでの発表（一部抜粋）＞

中川：

異文化交流会とは、留学生や異文化の背景を持った学生が参加するボランティアです。参加した学生は、韓国・中国・ドイツ・ドミニカ共和国・フィリピン・ネパール・ベトナム・香港・マレーシア・ペルーの計 10 カ国・地域出身でした。私は、ドミニカ共和国の背景も持っているので、ドミニカ共和国について紹介しました。

大野：

私は、韓国とタイのハーフで、異文化交流会では韓国について紹介をしました。私たち明海大学の留学生は自国の文化や食などの魅力的な部分を紹介しました。中学生たちは、自分の好きなもの、日本の文化や観光地、世界遺産について紹介をしてくれました。タブレットを使いながら、自分が伝えたいことを一生懸命発表している生徒の姿に毎回感動しました。

異文化交流会で感じたことは、英語に対して不安を抱いている生徒が多いということです。これは、現在の英語教育の課題だと思います。この課題を解決させる一つの方法として、英語を話すことに自信を持たせることが大切だと思います。そこで、英語に触れる機会や多くのインプットを与え、それと同時にアウトプットさせる機会が必要だということを学びました。私は、四月から教員になるので、生徒が英語に楽しく、自主的に触れられる機会を増やす工夫をしたいです。また、自信を持ってコミュニケーションを取れる人になってもらえるように、生徒への声掛けをして、励ますことを意識したいです。そして、異文化について多くの人に知ってもらえるように、積極的に紹介をしていきたいです。

中川：

世界地図を見せながら母国がどのエリアにあるか、などというクイズを考え、楽しんでもらえるように工夫をしました。私の母国語であるスペイン語の簡単な単語も教えました。その結果、英語だけでなくスペイン語にも楽しく触れてもらえました。

また、元気で明るく対応してくれる生徒が多い学校だったり、真面目にお話を聞いてくれる生徒が多い学校があったりと、それぞれの学校に特色があることを実感しました。そこで、生徒の特性に応じて、一人一人対応を変えることが重要だと学びました。例えば、なかなか発言できない生徒に対して、名前を呼び、こちらから質問してあげることで喜んで応えようとしてくれたので、私もうれしく思いました。

2024 大学生と話そう会

参加学生：25 人
【教職課程：11 人】
日本語学科３年：江尻　智佳、橋本　義晴、比嘉　彩夏、伊藤　彩花、仲田　光志、齋藤　詩恩
英米語学科３年：大沢　和心、知念　咲花
英米語学科２年：小泉　優斗、和田　航英、大塚　翼夢

【留学生：14 人】
経済学科４年：　宿　愛敏
経済学科３年：　レー　ティ　テム
経済学科１年：　カン　媛媛、劉　埔鑠、劉　心語、王　奕琳、ロウ　イ、単　恩慧、宋　嘉蕾、ファム　ザー　フイ、グエン　スアン　ソン
中国語学科２年：チャン　ティ　フォン　ブオイ
日本語学科４年：グエン　ティ　マイ
日本語学科１年：ソウ　羽セイ

１．はじめに

「大学生と話そう会」は、明海大学と教育連携協定を結んでいる高等学校６校の生徒を対象に 2018 年度から実施している。高校生が直接大学生と交流することで明海大学や大学生活について理解を深めることを目的としている。毎年、参加する高校生の中には外国にルーツをもつ生徒も多いため、教職課程履修学生の他に、本学の留学生もボランティアとして参加し交流を深めている。

２．はじめに

（１）　日時：2024 年５月 26 日（日）
午前 10 時から午後２時まで
（２）　会場：2101 講義室
30 周年記念学生ホール他
（３）　参加生徒：計 44 人
＜内訳＞
都立飛鳥高等学校７人、都立竹台高等学校５人、都立南葛飾高等学校 10 人、都立葛西南高等学校 22 人
（４）　プログラム内容
＜午前＞ 大学紹介（ビデオ鑑賞）、オープン・キャンパス見学、学食体験
＜午後＞ グループ活動、自己紹介、大学生への質問、SDGs に関するディスカッション

３．当日の様子

高校生たちは、引率の先生方と貸し切りバスで大学に到着した後、大学紹介ビデオを視聴し、当日行われているオープン・キャンパスの「学科魅力発見コーナー」の見学や学生食堂での昼食を体験した。午後の交流会では、グループに分かれて、自己紹介や大学生活についての Q&A を行った。

SDGs のディスカッションでは、各グループで３つのテーマ（飢餓、気候変動、エネルギー）の中から１つを選び、現状や課題を共有した後、自分たちにできることや解決策について話し合った。

４．参加者の声

【高校生】「話し合いで緊張したけれど、大学生がリードしてお話してくれて楽しかった」「現役である大学生の声を聞けて今後の将来についての勉強になった」

【学生：シンポジウム発表より】「行事の運営について学ぶとともに、高校生の進路選択に関してアドバイスして貢献できた」「グループ活動で進行役を務めて、高校生が参加しやすい雰囲気づくりができてよい経験になった」

2024 年度　都立田柄高校異文化交流会

参加学生：８人
日本語学科１年　：ゴティ　ダイ　チャン
英米語学科４年　：クエンカ　ダイアン　ニコル　バレンシア
英米語学科３年　：ヴォ　スァン　フォン
経済学科１年　　：ボルドスフ　ミシェール、グェンティ　フォン　ホン、ファム　ティ　フック
中国語学科２年　：チャン　ティ　フォン　ブオイ
ホスピタリティ・ツーリズム学科１年：チャン　トウイ　ミン　ヒエン

１．はじめに

本交流会は、本学と高大連携協定を締結している東京都立田柄高等学校との教育連携事業で、本学外国人留学生と高校生との交流を通じて、お互いの文化についての理解を深めることを目的としている。

本学からは、ベトナム、モンゴル、フィリピン出身の留学生８人が都立田柄高校に出向き、都立田柄高校からは１年生の生徒全員が交流会に参加した。

２．実施概要

（１）　日時：2024 年 10 月 30 日（水）
午後２時から午後４時まで

（２）　会場：都立田柄高校

（３）　内容：
①　文化紹介

本学留学生が、１年生５クラスに分かれて、自国の文化や日本での経験について、スライドを使いながら日本語で説明した。その後、生徒からの質問に答えた。

留学生が紹介した主な内容は、次の通りである。

・母語での挨拶
・自己紹介
・日本に来た理由
・日本に来て感じたこと
・日本で苦労したこと、失敗談
・日本で好きなこと、好きなもの
・日本で苦手なこと、苦手なもの
・自国の文化紹介
（観光名所、国旗の特徴、通貨、食べ物、祭などのイベント等）

②　国際交流委員との懇談

各クラスでの文化紹介の後、山﨑聡子校長の話を伺った後、都立田柄高校の国際交流委員と懇談会を行った。お互いに自己紹介したり、文化紹介の感想を述べたり、日本での生活などについてアドバイスをしたりした。

３．ボランティア学生の感想

参加した留学生からは「田柄高校の生徒たちが積極的に質問してくれて嬉しかった」「生徒たちが色々な文化に興味をもって聞いてくれて、発表してよかったと思った」などの感想が聞かれた。

７．学生発表（大学生による学習支援）

浦安市 小学校英語支援

参加学生	外国語学部英米語学科４年 池内　夏美、小川翔太郎、小川　悠真、高木　由紀、冨樫美智雄、仲田　未羽、森岡　凜、安田　結貴、吉澤　阿門 ３年 小松　由芙、霜方　柚奈、知念　咲花、花澤　真彩

１．実施の概要

明海大学は 2017 年に浦安市教育委員会と教育に関する連携協定を締結しており、それ以来、市内の公立小学校の英語・外国語活動に学生がボランティアとして参加し、授業の補助を行っている。

参加する学生は、英米語学科の学生のうち教職課程を履修し、将来、何らかの形で英語指導に携わりたいと希望している学生である。

授業では、担任や英語専科の教員、ALT の求めに応じて、対話の相手役や発音のモデルをしたり、児童への指示を手伝ったりする。また、ペアワークや英語のゲームに参加したりもする。個別の支援が必要な児童への援助をすることもある。

将来、英語教員を志す学生にとって、在学中に学校現場での英語指導の実践に携わることができるとても貴重な機会となっている。

また、学生は大学での授業と合わせて、この機会を利用して、一定の時間数、小学校英語の指導の経験を積むことで、J-SHINE 小学校英語指導者資格を取得することもできる。

今年度は、９月から３月までの期間、週に１、２回のペースで、南小学校、舞浜小学校、明海小学校、高洲小学校、入船小学校の５校に、英米語学科の４年生９人と３年生４人が参加した。

２．参加学生の声

（１）　賑やかで積極的に授業に参加するクラスもあれば、静かに椅子に座ってしっかり先生の話を聞いているクラスもあり、クラスによってギャップを感じる。また、クラス間だけでなく、クラスの中でも一人一人が違っており、サポートの仕方も様々である。積極的に英語を使って話すことができる児童には更に質問をして英語と向き合う時間を増やし、英語が苦手で会話に参加しにくいと感じていそうな児童には、隣で例を示して話しやすい環境を作ることを徹底している。英語の授業を児童にとって有意義なものにするために一人一人に対してどのようなサポートをするべきか、常に考えている。とても楽しい時間でもあり、私にとってとても素晴らしい時間となった。

（森岡　凜）

（２）　児童が活動に取り組んでいる間に、教室内を回って個別にフォローをした。英語が苦手な子には優しく声をかけ、簡単なヒントを出して会話をスムーズに進められるようにサポートした。また、児童が積極的に英語を話せるように、できた時は褒めたりするなど、ポジティブな声かけをするように心がけた。初めは緊張したが、担任の先生から「とにかく笑顔で児童と関わってみてください」とアドバイスをもらい、笑顔でいることを意識すると緊張もほぐれていった。小学校英語支援を通して、児童が楽しみながら英語を学ぶ姿を見ることができ、授業づくりや雰囲気づくりの大切さを知ることができた。ALT や担任の先生と協力して活動をする経験から、教師という仕事のやりがいを改めて感じた。

（花澤　真彩）

浦安市 青少年自立支援「未来塾」

参加学生	外国語学部日本語学科３年 江尻　智佳、小林　采和 外国語学部英米語学科４年 喜多　巧祐、仲田　未羽、布施　名菜、渡辺　もも

１．浦安市青少年自立支援未来塾

未来塾は、浦安市内の公立中学校９校の生徒を対象とし、基礎的・基本的な学力向上や学習習慣の定着を図ることを目的として、浦安市教育委員会が開催している学習支援事業である。週に１回、放課後に各中学校近隣の公民館に集まり、午後６時半から午後８時までの１時間半、英語と数学を隔週で学んでいる。６月の下旬から２月の中旬までの期間、英語、数学、それぞれ全 17 回実施する。教職や民間教育事業の経験者と大学生が、学習支援員として協力し合って指導に当たっている。

２．実施の概要

今年は、明海大学から日本語学科、英米語学科の学生６人が中央、堀江、美浜、日の出、高洲の５ヵ所の公民館に分かれ、英語教室や数学教室を担当した。

（１）　浦安中未来塾（中央公民館）
【英語教室】【数学教室】　喜多　巧祐

（２）　堀江中未来塾（堀江公民館）
【英語教室】【数学教室】　渡辺　もも

（３）　入船中・美浜中未来塾（美浜公民館）
【数学教室】　江尻　智佳、小林　采和

（４）　日の出中・明海中未来塾（日の出公民館）
【英語教室】　仲田　未羽

（５）　高洲中未来塾（高洲公民館）
【英語教室】【数学教室】　布施　名菜

３．参加学生の声

（１）　私は、学習支援ボランティアとして「未来塾」に参加し、中学３年生で英語が苦手な生徒を担当した。最初は多くの生徒が、文法や単語に自信がなく、問題に取り組む際には「分からない」と諦める様子が見られた。そこで、どこでつまずいているのかを丁寧に確認し、一緒に基礎を振り返ることから始めた。特に、主語と動詞の関係や時制の使い分けが曖昧になっていることが分かったため、具体的な例を示しながら説明すると、少しずつ理解を深めてくれた。できたところを積極的に褒めたり、簡単な問題から段階的に挑戦させたりすることで、自信を持ち始めたようだった。「分かった！」と笑顔を見せてくれた瞬間はとても嬉しく、教えることのやりがいを実感した。一方で、苦手意識を持つ生徒のモチベーションを高めることの難しさも痛感した。今回の経験を通じて、英語の指導だけでなく、生徒の気持ちに寄り添うことの大切さを学んだ。私は４月から実際に教壇に立つことになるので、中学校の英語教員になる準備としてもとても貴重な機会となり、今後の指導にも活かしていきたい。　（仲田　未羽）

（２）　私は、数学を担当した。この未来塾で、初めて実際に生徒たちと直接関わり、指導する経験ができた。私が担当していた中学１年生の生徒たちは、とても静かに学習に取り組んでいたが、なかなか質問が出なかったため、質問が出るのを待つのではなく、自分から積極的に声をかけることを心がけるようにした。すると、徐々に生徒たちからも声をかけてくれるようになり、私自身も未来塾に行くことが楽しくなった。直接生徒たちと触れ合うことで得たこの貴重な経験を大学４年生における自らの学修に活かし、教員になるべくしっかりと頑張りたいと思う。

（江尻　智佳）

明海小 児童育成クラブ

参加学生	外国語学部日本語学科３年 瓜田　謙心、早乙女愛菜、比嘉　彩夏、三島　茉姫 ２年 寳木原和心

１．浦安市児童育成クラブ

浦安市の児童育成クラブは、いわゆる学童保育で、就労等により保護者が昼間家庭にいない小学生児童を対象に、放課後や土曜日、長期休業期間等に、家庭に代わる生活の場を提供する事業である。市内の全ての小学校区ごとに 17 か所に置かれている。

その１つ「明海小学校地区児童育成クラブ」は、浦安市立明海小学校に隣接し、市の委託を受けて労働者協同組合ワーカーズコープセンター事業団が運営をしている。毎日 180 人近い児童が通って来て、小学校の校庭を走り回ったり、砂場や鉄棒等で遊んだりして楽しんでいる。また、児童育成クラブの庭でドッジボールやサッカーをしたり、屋内で工作をしたり、静かに勉強をしている児童もいる。

今年度は教職課程履修する日本語学科の学生５名が、週１、２回、午後１時 30 分から午後７時 30 分までの時間帯で３時間程度、児童の見守りの支援をしている。

２．明海小学校地区児童育成クラブの大切にしている３つのこと

（１） やりたいことをできることに変える。
（２） 子どもだけの世界を守る。
（３） 見守られながら自分で考えて自分で決める。

３．参加学生の声

（１） このボランティアに参加して強く感じているのは、自分自身が発言できる場のありがたみである。子どもたちが来る前のミーティングから参加することが多く、私たち学生にも発言する機会が与えられている。課題に感じていることについて話すと、所長をはじめ多くの職員が必ずアドバイスをしてくれる。また、「いてくれるだけで子どもたちのためになるよ」とか「いったん自分を認めてあげると良いよ」などと常に私のことを肯定してくれるので、どんどん自信がつき、堂々と働くことができるようになった。子どもを相手に働くのは初めてで、普段から悩むことが多い私にとって、教師として子どもに関わる前に、このように自分の気持ちや考えに耳を傾けてくれる職場で働く経験ができるのはとても貴重なことだと強く感じる。私の成長を自分ごとのように喜んでくれるこの明海小学校地区児童育成クラブで働くことができて本当に良かったと心から思う。

（比嘉　彩夏）

（２） 私がこのボランティア活動を通して学んだことは、子どもの意思を尊重することの大切さである。明海小学校地区児童育成クラブに通う子どもたちは、自分自身の考えを持ち、それを発信できる子どもが多い。それは、子どもが主体という考えを大切にしているからなのだろうと思う。大人が決めたルールを押し付けるのではなく、子どもたちの考えを尊重することで、創造性を養うことができ、自分の考えを発信できるようになるだけでなく、相手の意見も聞き、他者との関わり方も学ぶことができ、社会性も身に付けられるのではないかと感じた。学童ボランティアに参加しているからこそ学べることがあり、私自身が大きく成長できる場だと思っている。

（三島　茉姫）

江戸川区立篠崎中学校　英語部活動支援

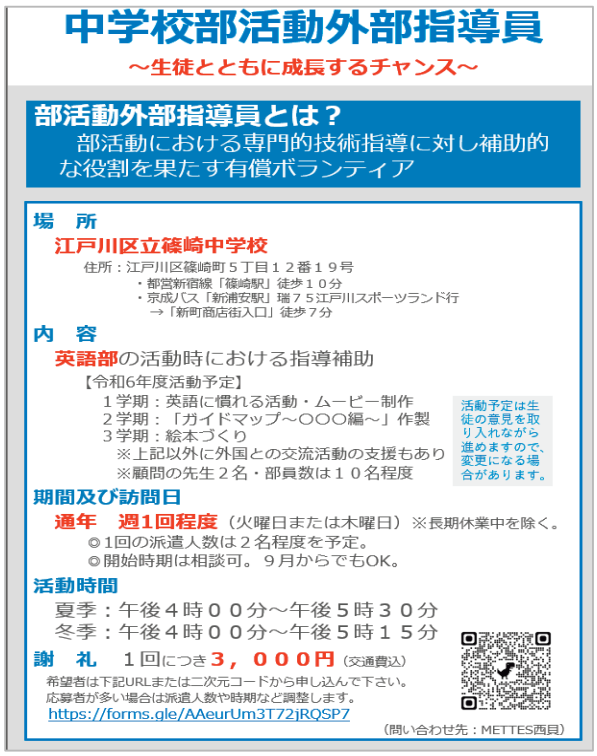
参加学生	外国語学部英米語学科４年 小川翔太郎、吉澤　阿門

１．クラブ・部活動外部指導員

東京都江戸川区では平成 30 年に「学校における働き方改革プラン」が策定され、教員の長時間勤務の是正に向けた取り組みを実施しているが、それらの取り組みの一つに部活動外部指導員の配置がある。

部活動外部指導員は、部活動において生徒が専門的技術指導を受けるために、実技指導の補助的役割を果たしている。これまでも江戸川区内の多くの学校で外部指導員が任用され、部活動を支援しており、教員の負担軽減にも効果がでていると報告されている。

本学地域学校教育センターは、2023 年度末に江戸川区立篠崎中学校から英語部活動の支援に関する依頼を受け、実現に向けた具体的な計画を進めてきた。教職課程履修学生に以下の案内を配布し希望者を募ったところ、英米語学科４年の２名が 10 月から訪問可能であると申し出てくれた。



中学校部活動外部指導員

～生徒とともに成長するチャンス～

部活動外部指導員とは？

部活動における専門的技術指導に対し補助的な役割を果たす有償ボランティア

場　所

江戸川区立篠崎中学校

住所：江戸川区篠崎町５丁目１２番１９号

・都営新宿線「篠崎駅」徒歩１０分

・京成バス「新浦安駅」瑞７５江戸川スポーツランド行 →「新町商店街入口」徒歩７分

内　容

英語部の活動時における指導補助

【令和6年度活動予定】

１学期：英語に慣れる活動・ムービー制作

２学期：「ガイドマップ～○○○編～」作製

３学期：絵本づくり

※上記以外に外国との交流活動の支援もあり

※顧問の先生２名・部員数は１０名程度

活動予定は生徒の意見を取り入れながら進めますので、変更になる場合があります。

期間及び訪問日

通年　週1回程度（火曜日または木曜日）※長期休業中を除く。

◎1回の派遣人数は２名程度を予定。

◎開始時期は相談可。９月からでもOK。

活動時間

夏季：午後４時００分～午後５時３０分

冬季：午後４時００分～午後５時１５分

謝　礼　１回につき**３，０００円**（交通費込）

希望者は下記URLまたは二次元コードから申し込んで下さい。

応募者が多い場合は派遣人数や時期など調整します。

https://forms.gle/AAeurUm3T72jRQSP7

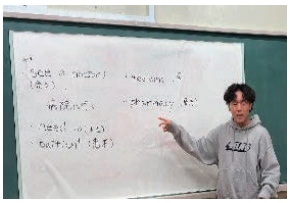
（問い合わせ先：METTES西員）

２．活動内容

２名は 10 月から英語部の活動支援を開始した。毎週火曜日に学校を訪問し、１時間程度、一緒に活動して、部員が英語を使って表現する力を自ら伸ばせるようアドバイスをしてきた。

主な活動は、あるトピックについて英語で意見交換、オリジナル・スキットの実演、英語落語の発表に向けた指導であった。

学生は訪問前に「何を」、「どのように」すれば充実した活動になるかについて相談しながら事前準備を行っていた。生徒の意欲や個性を引き出し、英語の楽しさを感じてもらえるよう心掛けているとのことであった。



３．外部指導員の経験から学んだこと

外部指導員の経験は、学生の教職に対する理解を深めた。学生の声を以下にまとめる。

- 週１回の指導であったが、生徒の成長は自分たちが想像していた以上に速く、吸収力とスキル向上に圧倒された。
- 生徒たちの成長を目の当たりにできることに教職という仕事のやりがいと魅力を感じた。
- 今回の英語部活動支援を通じて、教員に必要な力は、生徒一人一人に寄り添い、生徒の個性や興味に応じた指導ができることだと改めて感じた。
- 英語を教える際は、生徒に学びの楽しさを伝えることが重要である。英語を単なる知識としてではなく、実生活で使えるスキルとして、楽しく学べる環境を作ることが求められる。楽しさを感じることで、学習意欲が高まり、英語習得の魅力を生徒自身が体験をして、実感できるようにすることであると考えた。

足立区民対象英会話講座

参加学生	外国語学部英米語学科 ４年　冨樫美智雄 ３年　霜方　柚奈、知念　咲花、花澤　真彩 ２年　嶋崎意住美

１．事業概要

足立区民対象の英会話講座は、足立区が主催する一般区民を対象に開講している講座である。2020年開催予定であった東京オリンピック・パラリンピックに向けて2017年に始めた連携事業である。コロナ禍で中止となった 2020 年度を除き今年度で、７回目の実施となった。

今年度のテーマは「海外旅行＆インバウンドにも対応！旅と出会いの初級英会話講座」とし、年間２クール（第１クールを５～６月、第２クールを９～12月）で開催され、各クール５回ずつ日曜日の午前中に足立区内の会場で実施された。受講者は第１、第２クールともに約30名、幅広い年齢層の方々が共に英語を学ぶということが本講座の特徴とも言える。

今年度は、これまでも講師をされてきたパトリツィア・ハヤシ教授、タイソン・ロード准教授と、新たに西貝裕武教授が講師として担当した。また、各講座には２人から３人の明海大学英米語学科教職履修学生が受講者のサポート役として参加した。

２．活動内容と受講者の様子

学生の役割は、写真のように、講座内で行われる活動中における受講者のサポートである。活動内容は講座のテーマに沿った海外旅行やインバウンドを想定したコミュニケーション活動であった。

受講者の年齢層は20代から70代と幅広く、様々な意見やアイデアを交換し合うことで、学びを深めているようであった。活動中、浮かんだ疑問を講師や学生に質問する姿、学んだ英語を使って会話をする姿など、熱心に学習に臨む姿がとても印象的であった。

３．講座を通して学んだこと

参加した学生が学んだことを様々であるが、２つの視点から学生の声をまとめたい。

○ 英語学習の目的と英語教育

この講座の最大の特徴は、多様な受講者の方々が共に学び合う環境である。留学や海外旅行のために英語を学びたい方、親子で一緒に参加されている方、ご夫婦で楽しく学習されている方など、それぞれの目的やきっかけが異なる。

教職課程で学ぶ私たちにとって、生徒一人一人に英語を学ぶ意味や楽しさが伝わるような授業を行うことや、多様な個からなる集団で学び合うことのよさを実感するような活動を工夫することが生徒の主体的な学びを持続させる上で重要であると改めて実感した。

○ 英語教育と地域活性化

講座期間中に足立区の街を外国人に案内するボランティアに数名の方が参加を希望したと知った。このことは、講座での学びが地域の活性化にも繋がっていると思い、嬉しく感じた。インバウンド需要や、地域における外国人住民との共生という側面からも、外国語学習への関心が世代を超えて高まることは、地域の活性化にも繋がる。英語教育は多様なニーズに応えながら、地域社会に貢献する役割もあると感じた。

2024 年度　足立区英語マスター講座修了者によるスピーチ・プレゼンテーションコンテスト	
参加学生	外国語学部英米語学科４年 高木　由紀、小川翔太郎、池内　夏美 ３年 大沢　和心、大場　伊織、霜方　柚奈、知念　咲花、花澤　真彩 ２年 嶋崎意住美、シモマエ　サイリエル　ミー　ピニオン、和田　航英

１．はじめに

明海大学・足立区連携事業における「英語マスター講座修了者によるスピーチ・プレゼンテーションコンテスト」は、足立区英語マスター講座を修了した中高生がその成果を発表する場で、生徒たちが継続的に英語運用能力を磨き、さらにその力を高める機会とすることを目的として 2019 年より開催されている。明海大学英米語学科の教職課程履修学生にとっては、運営をサポートしながら、中高生の英語コミュニケーションの現状について学ぶ機会となっている。

２．実施概要

（１）　日時：2024 年 11 月３日（日）
　　午前９時から午後３時まで

（２）　会場：明海大学浦安キャンパス

（３）　参加者：
- 足立区発表生徒６人
- 明海大学ボランティア学生 11 人
- 審査員（MLACC）２人
- 挨拶者：　中嶌裕学長（明海大学）
　　中村明慶教育長（足立区）

その他、足立区教育委員会、発表生徒保護者、大学関係教職員が参観

（４）　内容：
- 足立区立中学生によるプレゼンテーション
- 審査員との質疑応答
- 明海大学生によるモデル・スピーチ
- 表彰：中嶌学長から全員に各賞を授賞
- パトリツィア・ハヤシ教授とタイソン・ロード准教授による特別講座
　　（コミュニケーション活動）

（５）ボランティア学生の役割

（運営補助）司会進行、進行補助、スライド・PC 操作補助、審査員補助、記録撮影、誘導を行った。

（モデル・スピーチ）中学生の発表に続き、２年生３名の学生がスピーチを行った。スピーチタイトルは次の通り。

English Education in Japan	Wada Koei
Food Waste in Japan	Shimomae Cyrielle Mie Pinion
Let the Confidence Out	Shimasaki Izumi

● 発表者と保護者、学生、関係者

● 午後の特別講座の様子

３．学生の感想（シンポジウム発表から）

- 大学生として中学生にスピーチ・モデルを示すことができ、自分たち自身の学びにつながった。
- 実際にこのイベント運営に関わることで、行事運営について体験を通して学ぶことができた。
- 午後の特別講座で行った多くのコミュニケーション活動は、今後、教員として授業をする上での参考になった。

８．パネルディスカッション

こどもまんなか社会へ　大学と地域がつなぐ未来の絆

パネリスト

定 野　　司（東京みらい中学校 校長）
川 瀬　　穣（東京都足立区教育委員会 統括指導主事）
伊達﨑　広（東京都立南葛飾高等学校　校長）
池内　夏美（明海大学外国語学部英米語学科４年）
安田　結貴（明海大学外国語学部英米語学科４年）

コーディネーター

山本　聖志（明海大学地域学校教育センター 教授）

記録の詳細についてはこちらをご覧ください⇒

― 内容（発言の趣旨を踏まえた要約版）

１．はじめに

【山本】　本シンポジウムのテーマは「こどもまんなか社会へ　ー大学と地域がつなぐ未来の絆ー」であり、地域・学校・大学が連携し、子どもの学びと成長を支える仕組みについて議論する。明海大学が教育委員会や高校と連携し、学生がボランティアとして関わる取組を紹介するとともに、基調講演で述べられた「子どもを対等な存在として尊重すること」の重要性を踏まえ、地域や大学の協力による支援の充実を目指すことを強調した。

続いて、パネリストとして以下の登壇者とそれぞれの発言テーマについて紹介した。

・定野　司（東京みらい中学校校長）
不登校支援と多様な学びを提供する学校運営について。

・伊達﨑　広（東京都立南葛飾高等学校校長）
高校教育における主体的な学びと地域連携の取組について。

・川瀬　穣（足立区教育委員会統括指導主事）
義務教育段階の学力保障と行政の役割について。

・池内　夏美／安田　結貴（明海大学４年生）
大学生の視点から、教育現場での経験と将来の教員としての意識について。

パネルディスカッションでは、子どもたちが未来を築くために大学・地域・学校が果たす役割について意見を交わし、よりよい支援の在り方を考えることが目的とされた。

２．こどもまんなか社会の現状と課題

【定野】　明海大学と足立区の連携の経緯を説明し、英語教育や異文化交流などの取組が継続されていることに感謝を述べた。その上で、教育長時代には、不登校の増加に対応するため、多様な学びの場を整備してきたと振り返る。別室登校やフリースクール、適応指導教室の導入を進め、子どもたちが学校に通うことを目的とするのではなく、社会で自立できる環境を整えることが重要だと強調した。

現在校長を務める東京みらい中学校は、不登校の特例校として、従来の学校とは異なる柔軟な学びを提供している。定期テストや給食を廃止し、授業時間を短縮することで、生徒が主体的に学べる環境を整えている。また、「チョイスタイム」と呼ばれる選択授業を導入し、教師が自由な発想で授業を行い、生徒が自分の興味に合わせて選べる仕組みを作ったと説明。こうした取組が、子どもたちにとって選ばれる学校のあり方の一例となり、今後も多様な学びの選択肢が広がることを期待していると述べた。

【伊達﨑】　東京都では、都内公立学校生徒１万人の意見を参考に「東京都教育ビジョン第五次」を策定するなど、子どもの意見を尊重する動きが進んでいると述べた。特に、中学校では校則の見直しが進み、ジェンダーレス制服の導入などが実現したが、高校では十分に進んでいないと指摘。南葛飾高校でも、生徒の意見集約アンケートは行ったが、生徒会を通じた具体的な行動には、なかなかつながらず、改革の難しさが課題となっていると述べた。

また、「ハニワスタイル」（スカートの下にジャージを履くスタイル）が広がっているが、校則に明確な規定がなく、対応が難しい現状を紹介。従来の「決められていないから認めない」という指導方針ではなく、生徒と対話しながらルールを柔軟に考えていくことが必要だと強調し、高校教育の場でも「こどもまんなか」の視点を取り入れるべきだと述べた。

【川瀬】　学力格差の問題に触れ、子どもたちが

生まれ育った環境によって将来が左右されないよう、教育行政として支援策を講じる必要があると強調した。足立区では、「夢や希望を信じて生き抜く人づくり」を基本理念に掲げ、学力の向上を図るための施策を推進している。教育の目的は単なる知識の習得ではなく、人格の形成や心身の成長を支えることにあると述べた。

また、学力を「認知能力（読み書き計算）」と「非認知能力（問題解決力や自己調整力）」の両面から捉え、バランスよく向上させることが重要だと説明。特に、教師主導の授業から学習者主体の授業へと移行することで、子どもたちが主体的に考え、問いを立て、解決策を見出す力を育む必要があると述べた。最後に、子どもたちが本来持つ可能性を最大限に引き出すことが、教育機関や行政の使命であると強調した。

【池内】　教員として大切にしたいこととして、生徒一人ひとりに寄り添ったサポートの重要性を挙げた。生徒の個性や能力には違いがあるため、それぞれの状況をしっかりと把握し、適切な支援を行うことが必要だと考えている。

また、現場で直面しそうな課題として、教員同士の意見や価値観の違いを挙げた。教育に対する考え方は多様であり、その違いを尊重しつつ、生徒の成長を支えるために、他の教員と積極的に意見交換を行いながら教育活動を進めていきたいと述べた。

３．具体的な取組と成果

【伊達﨑】　学校が変わるべき時期に来ていると強調した。従来の教育では、ルールの内容自体が長年見直されずに維持されてきたが、多様性が求められる現代においては、学校も変革を迫られていると指摘した。また、学生たちが地域で実践的な活動を行い、そこから学んだ経験を教育現場に持ち込むことで、学校の在り方もより良い方向に変わる可能性があると述べた。

さらに、コロナ禍によって学校と地域とのつながりが一度断たれたことに触れ、これを機に新しい形の地域との連携を模索すべきだと提案した。地域活動やボランティアを通じて生徒が自己有用感を高めることで、学びへの意欲向上にもつながると考えており、ICT や DX では代替できない実体験の価値を重視すべきだと述べた。

【川瀬】　足立区が推進する「足立スタンダード」について説明し、学習者主体の授業を重視する取組を紹介した。授業の導入では教師が学習のめあてを提示するのではなく、生徒自身がめあてを考え、授業のまとめも教師主導ではなく、生徒が自らの言葉で整理するようにしている。これにより、生徒が主体的に学ぶ力を身に付けることを目指している。また、足立区の教員は授業力が高いとの声を他の自治体から聞くこともあり、このような取組が教育の質の向上につながっていると述べた。さらに、知識は単に与えられるものではなく、生徒が思考を通じて形成していくものであり、教師は知的好奇心を刺激し、生徒の主体性を引き出す役割を担うべきだと指摘。多面的・多角的な視点で考え、判断する力を育む授業の重要性を強調した。また、非認知能力の育成にも触れ、自己肯定感や自己有用感を高めることが生徒の成長に不可欠であるとし、地域と連携しながら教育を進めることで、より充実した学びの環境を構築できると述べた。

【定野】　東京みらい中学校では、従来の学校運営の枠にとらわれず、学年担任制を採用し、教員が協力して生徒を多面的に支援する体制を整えている。生徒の好奇心を育むことを重視し、専門学校の学生と交流する機会を設けるなど、実践的な学びを提供。校則や宿題、定期テストを設けず、生徒自身が学習の必要性を感じる仕組みを整えている。夏休みの宿題をなくした結果、生徒から自主的に学習の相談が持ちかけられるようになった例を挙げ、学びの主体性を尊重する重要性を強調した。また、いわゆる通知表に変わる「道しるべ」を導入し、生徒が自分自身の成長を実感できる仕組みを構築。学習の進捗を一歩ずつ確かめながら前進することで、他者との比較ではなく、自身の成長を目標にする意識を育てている。特に「待つこと」の重要性を強調し、教員が結論を急がず、生徒が自分で学びの意義を見出すのを促す姿勢が求められると述べた。

【安田】　子どもたちに「学びたいことを見つける力」と、生成 AI やインターネットを「主体的に活用し、効果的に学ぶ力」を育てたい。何のために学ぶのかを考えさせ、挑戦する姿勢を養うことが

重要だと考える。
教員として、生徒の関心を把握し、授業に取り入れる工夫をしたい。また、生徒の意見を尊重し、自ら課題に気づけるよう対話を重ねる。定期的に授業や学校生活に関するアンケートを実施し、より良い授業づくりに生かしたい。

4．質疑応答①

【橋本（外国語学部日本語学科３年）】
現在の教育が過去のモデルと大きく異なることについて、従来の「先生像」を打ち破るために何が必要かを質問した。

【定野】　疑問を持つこと自体を楽しむ姿勢が重要であり、生徒が自ら探究し考える機会を持つことが必要だと述べた。
【伊達﨑】　現代の教育が知識伝達型から探究型へ移行している点を強調し、教員自身が探究する姿勢を持つことが求められると指摘した。
【川瀬】　教員は子どもたちと共に学び、柔軟な姿勢で授業を創造することが大切だと述べた。

5．今後の展望

今後の展望として、学校、地域、大学が協力し、子どもたちの学びや社会参画を支える方法について議論が交わされた。

【定野】　子どもは未熟な大人ではなく、現在の大人を超える存在として成長するエンジンを持っていると指摘した。教育の本質は、子どもたちが成長し、夢や希望を持てる環境を整えることであり、それを実現するのは大人の責任であると強調した。また、「子どもが大人になりたいと思える社会を作るべきだ」という考えを示し、そのためには大人自身が生き生きと働き、ロールモデルとなることが重要だと述べた。最後に、次回のシンポジウムには中高生を参加させ、彼ら自身の意見を直接聞く機会を設けることを提案した。
【伊達﨑】　生徒の心を育てる教育を重視し、頭ごなしの指導ではなく、生徒自身が納得しながら成長できる環境を整えることが重要だと述べた。学校が楽しい生活の場となるためには、生徒が尊重されることが前提であり、ルール作りも生徒と教員が対話を通じて決めるべきだと強調した。その過程で民主主義の実践を学び、多様な意見を尊重し合う経験が生徒の成長につながると考えている。
また、学校は多様な体験の場であるべきだとし、経済的な状況にかかわらず、すべての生徒が体験を通じて学べる機会を提供することが必要だと述べた。特に、地域と連携した探究活動や部活動等を推進し、学校と地域が相互に支え合う関係を築くことの重要性を強調した。

【川瀬】　足立区における子どもたちの意見を尊重する取組として、昨年 10 月に開催された「あだち中学生会議」を紹介。そこで生徒たちが「自分たちで考える授業がよい」「ICT を活用した授業がわかりやすい」と発言したことに触れ、教育現場が生徒の要望を反映した授業を提供していくことの重要性を強調した。また、明海大学との連携を高く評価し、異文化交流会やあけみ英語村が児童・生徒にとって「使える英語力」を育む貴重な機会となっていると述べた。さらに、区内の大学や地域人材とも協力し、デジタル技術の活用とリアルな体験のバランスをとりながら、子どもたちに充実した学習環境を提供していくことの必要性を訴えた。

【池内】　大学生として子どもたちに提供できる価値として、多様な人と関わる機会を挙げた。あけみ英語村などを通じて、小学生が大学生や留学生と交流することで、言語や文化の違いを学び、身近な存在として大学生と接することができる点を強調。また、教師としては子どもたちの声に寄り添い、個性を尊重しながら成長を支える存在になりたいと述べた。

【安田】　あけみ英語村のボランティア経験を通じて、子どもたちが英語を楽しみながら学ぶ様子

を実感。英語を話せることへの憧れや、海外への興味を持つきっかけを与えられると考えている。目指す教師像としては、生徒一人ひとりの可能性を引き出し、やりたいことに向かって行動できる力を育成することを重視したいと述べた。

６．質疑応答②

【小川（外国語学部英米語学科４年）】　子どもたちに意見を表明する機会を与えることの重要性を認めつつ、意見が通る経験だけでなく、通らなかった経験も必要ではないかと指摘し、バランスの取れた「こどもまんなか社会」の実現に必要な要素について質問した。

【定野】　議論の前に対話が必要であり、互いの意見や立場を理解するプロセスが不足していることが不満や対立を生むと説明。また、子どもたちは成長する存在であり、単に「まんなか」に置くのではなく、大人になる過程を支えることが重要だと述べた。

【伊達﨑】　子どもの意見が必ずしも反映されるわけではなくとも、対話を通じて合意形成する場を設けることが重要だと強調した。

【川瀬】　教師が教えるべきことを教え、伴走者として生徒を適切に導くことが必要だと述べた。教育現場では「ティーチング」よりも「コーチング」を意識し、教師が生徒を見守りながら適切な支援を行うべきだと述べ、バランスの取れた教育の重要性を指摘した。

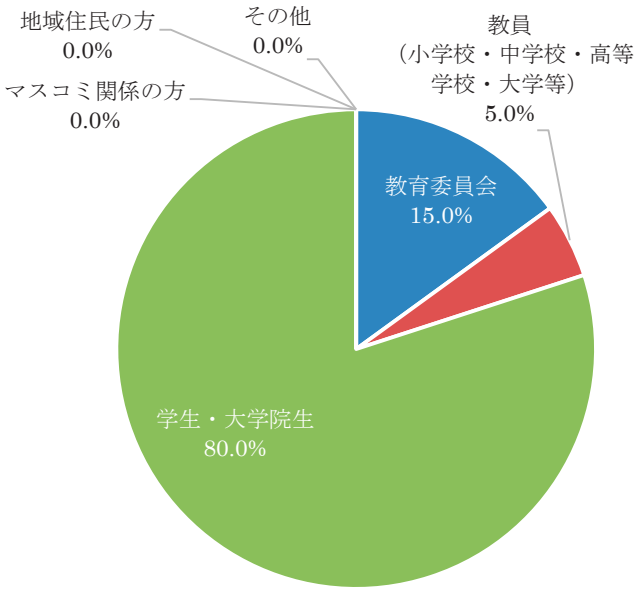
６.まとめと閉会

【山本】　質問が非常に重要なものであったことに言及し、質疑応答を締めくくるとともに、質問者への拍手を促し、パネルディスカッションを終了することを告げた。

９．アンケート

◆所属を教えてください。

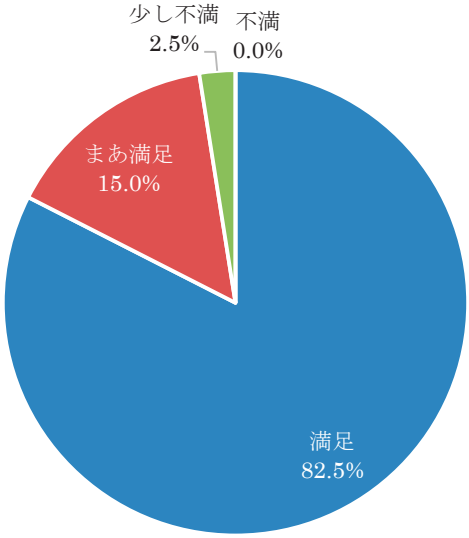
教育委員会	12	人
教員（小学校・中学校・高等学校・大学等）	4	人
学生・大学院生	64	人
マスコミ関係の方	0	人
地域住民の方	0	人
その他	0	人
計	80	人



・　昨年と比較すると、教員の参加の減少を、学生・大学院生がカバーしているかたちになっている。

◆基調講演はいかがでしたか。

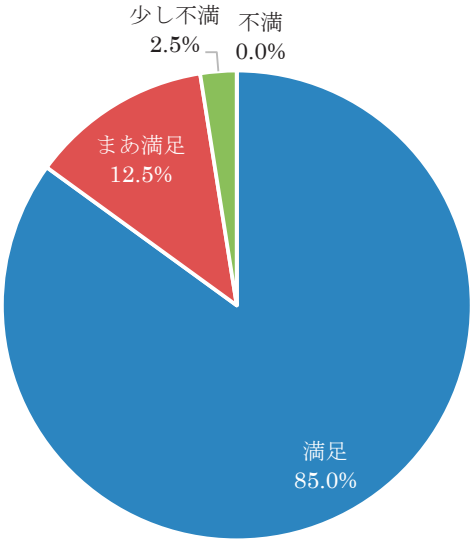
満足	66 人
まあ満足	12 人
少し不満	2 人
不満	0 人
計	80 人



・　ポジティブな意見では「教育の場で生徒、児童への心がけをより一層高める事ができる内容だった」「テーマと主旨が学生に響いていると感じた」などが、ネガティブな意見では「少し難しい内容であり言葉だけでは理解が大変だったのでスライドがあると更に理解が深められた」などがあった。

◆学生発表はいかがでしたか。

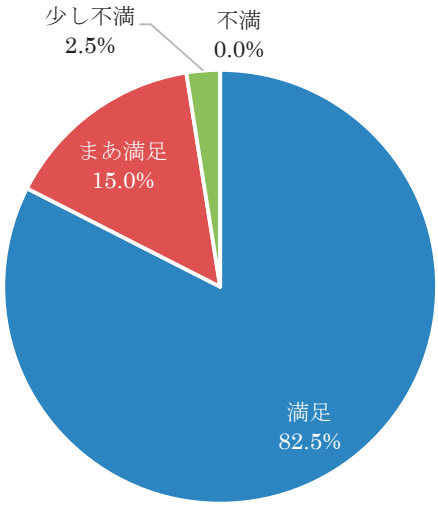
満足	68 人
まあ満足	10 人
少し不満	2 人
不満	0 人
計	80 人



・　ポジティブな意見では「成果だけでなく、次回以降に繋がるであろう課題も発見されている」「相手の立場や考えを捉えて、主体的に活動に取り組んでいることが非常に伝わってきた」「学校にとっても学生にとってもプラスになる活動だと再認識した」などが、ネガティブな意見では「質問された内容と回答がずれていたように感じた。理由を聞かれているのに対策を答えているシーンも見受けられた」などがあった。

◆パネルディスカッションはいかがでしたか。

満足	66 人
まあ満足	12 人
少し不満	2 人
不満	0 人
計	80 人



・　ポジティブな意見では「学生から学校現場で活躍されている校長先生、そしてそれらを支える学力推進課の方など幅広い方々の意見や実際に取り組まれていることをそれぞれがとても丁寧に説明しており、とても学びになる部分が多かった」「教育現場における未来への提案を知ることができ、将来自分が直面するであろう課題を深く考えることができた」などが、
ネガティブな意見では「あまり、質問に対しての答えになっていないのではないかと感じる部分が何度かあった」などがあった。

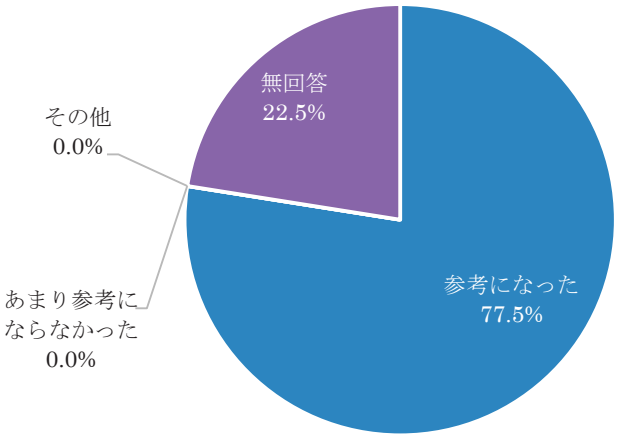
◆Zoom によるオンラインで参加した方にお聞きします。映像や音声などの配信はいかがでしたか。

※回答数２件の為、集計表のみ掲載

満足	1 人
まあ満足	1 人
少し不満	0 人
不満	0 人
計	2 人

◆配布資料（リーフレット）は参考になりましたでしょうか。

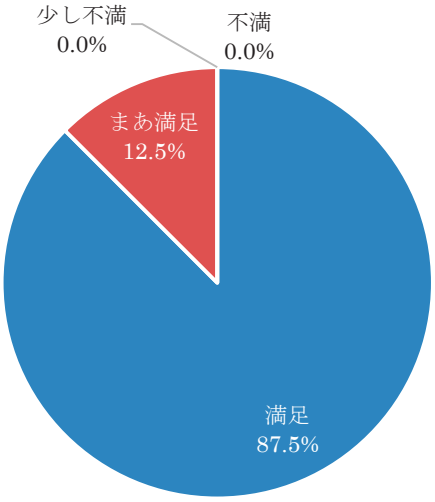
参考になった	62 人
あまり参考にならなかった	0 人
その他	0 人
無回答	18 人
計	80 人



・　内容が分かりやすかったという趣旨のポジティブな意見が多数を占める中、パネリストの発言の視点が明確にされているとわかりやすいという意見も見受けられた。

◆総合的に見て、本シンポジウムにご満足いただけましたか。

満足	70 人
まあ満足	10 人
少し不満	0 人
不満	0 人
計	80 人



次年度以降に取り扱って欲しいテーマとしては
「国際化・多文化の教育」「生成 AI」「地域連携と探究」
などが挙げられた。

10. 2024 年度 METTS 事業参加学生一覧

2024年度 METTS 事業参加学生一覧

日本語指導支援（飛鳥高等学校）

<全日制課程>

応用言語学研究科博士前期課程１年

チン　ヴァン　コン

<定時制課程>

日本語学科３年　呉　トウドン

応用言語学研究科博士前期課程２年　田中　愛唯

日本語指導支援（都立南葛飾高等学校）

応用言語学研究科博士後期課程２年　沈　伽迪

応用言語学研究科博士前期課程１年

姜　チョウ健

日本語学科４年　竹澤　佳祐

日本語学科３年　石橋　聡史

日本語学科３年　古川　ゆら

日本語学科３年　孫　瑩超

日本語学科３年　佐藤　千織

日本語指導支援（都立竹台高等学校）

応用言語学研究科博士前期課程１年　紀　美

明海大学あけみ英語村 2024（留学生）

英米語学科４年　キム　スヨン

英米語学科４年　コースケ　キンニンエイ

英米語学科４年　ユキ　ラング

英米語学科４年　ヘンリー　マー

英米語学科４年　ナサリー　ナカガワ

英米語学科４年　エミー　ナガキ

英米語学科４年　コータ　ナルバエス

英米語学科４年

クエンカ　ダイアン　ニコル　バレンシア

英米語学科３年　ジェシカ　マンラペス

英米語学科３年　グェン　ホン　ユウ

英米語学科３年　ヴォ　スァン　フォン

英米語学科２年　イズミ　ホマウアス

英米語学科２年　サイリエルミー　シモマエ

英米語学科１年　シャルチ　ヒラ

英米語学科１年　キイラ　ドロスト

英米語学科１年　ペ　ユラ

ＨＴ学科３年　サプコタ　ルペス

明海大学あけみ英語村 2024

（教職履修生）

英米語学科４年　池内　夏美

英米語学科４年　小川　翔太郎

英米語学科４年　小川　悠真

英米語学科４年　折笠　渉

英米語学科４年　喜多　功祐

英米語学科４年　久保田　波南

英米語学科４年　高津　誠也

英米語学科４年　小林　聖菜

英米語学科４年　坂内　隆斗

英米語学科４年　佐藤　百恵

英米語学科４年　舘田　悠輝

英米語学科４年　田中　星来

英米語学科４年　田中　啓夢

英米語学科４年　田中　陸

英米語学科４年　豊島　隼人

英米語学科４年　中谷　竜生

英米語学科４年　仲田　未羽

英米語学科４年　原山　要佑

英米語学科４年　藤木　貴生

英米語学科４年　布施　名菜

英米語学科４年　古川　湖菜

英米語学科４年　森岡　凜

英米語学科４年　安田　結貴

英米語学科４年　吉澤　阿門

英米語学科４年　吉田　優奈

英米語学科４年　渡辺　もも

英米語学科４年　渡口　純加

英米語学科３年　大坂　和希

英米語学科３年　大沢　和心
英米語学科３年　大場　伊織
英米語学科３年　齋藤　亜怜
英米語学科３年　霜方　柚奈
英米語学科３年　知念　咲花
英米語学科３年　花澤　真彩
英米語学科３年　福山　杏吏
英米語学科３年　山本　陽輝
英米語学科３年　芳野　友介

足立区中学校異文化交流事業（扇中学校）

英米語学科４年　キム　スヨン
英米語学科４年　コースケ　キンニンエイ
英米語学科４年　ユキ　ラング
英米語学科４年　ヘンリー　マー
英米語学科４年　ナサリー　ナカガワ
英米語学科４年　エミー　ナガキ
英米語学科４年　コータ　ナルバエス
英米語学科４年
　　クエンカ　ダイアン　ニコル　バレンシア
英米語学科３年　グェン　ホン　ユウ
英米語学科３年　ヴォ　スァン　フォン
英米語学科２年　イズミ　ホマウアス
英米語学科２年　サイリエルミー　シモマエ

足立区中学校異文化交流事業
（谷中中学校）

英米語学科４年　キム　スヨン
英米語学科４年　コースケ　キンニンエイ
英米語学科４年　ユキ　ラング
英米語学科４年　ヘンリー　マー
英米語学科４年　ナサリー　ナカガワ
英米語学科４年　エミー　ナガキ
英米語学科４年　コータ　ナルバエス
英米語学科４年
　　クエンカ　ダイアン　ニコル　バレンシア
英米語学科３年　ジェシカ　マンラペス
英米語学科３年　グェン　ホン　ユウ
英米語学科３年　ヴォ　スァン　フォン
英米語学科２年　イズミ　ホマウアス
英米語学科２年　サイリエルミー　シモマエ
英米語学科１年　シャルチ　ヒラ
英米語学科１年　キイラ　ドロスト
英米語学科１年　ペ　ユラ

足立区中学校異文化交流事業
（花畑中学校）

英米語学科４年　キム　スヨン
英米語学科４年　コースケ　キンニンエイ
英米語学科４年　ユキ　ラング
英米語学科４年　ヘンリー　マー
英米語学科４年　ナサリー　ナカガワ
英米語学科４年　エミー　ナガキ
英米語学科４年　コータ　ナルバエス
英米語学科４年
　　クエンカ　ダイアン　ニコル　バレンシア
英米語学科３年　ジェシカ　マンラペス
英米語学科３年　グェン　ホン　ユウ
英米語学科３年　ヴォ　スァン　フォン
英米語学科２年　イズミ　ホマウアス
英米語学科２年　サイリエルミー　シモマエ
英米語学科１年　シャルチ　ヒラ
英米語学科１年　キイラ　ドロスト
英米語学科１年　ペ　ユラ

足立区中学校異文化交流事業
（栗島中学校）

英米語学科４年　ヘンリー　マー
英米語学科４年　コータ　ナルバエス
英米語学科４年
　　クエンカ　ダイアン　ニコル　バレンシア
英米語学科３年　ジェシカ　マンラペス
英米語学科３年　ヴォ　スァン　フォン
英米語学科２年　イズミ　ホマウアス

大学生と話そう会 2024（教職履修生）

日本語学科３年　伊藤　彩花
日本語学科３年　江尻　智佳
日本語学科３年　齋藤　詩恩
日本語学科３年　仲田　光志
日本語学科３年　橋本　義晴
日本語学科３年　比嘉　彩夏
英米語学科３年　大沢　和心
英米語学科３年　知念　咲花
英米語学科２年　大塚　翼夢
英米語学科２年　小泉　優斗
英米語学科２年　和田　航英

大学生と話そう会 2024（留学生）

経済学科４年　宿　愛敏
経済学科３年　レー　ティ　テム
経済学科１年　カン　媛媛
経済学科１年　劉　埔鑠
経済学科１年　劉　心語
経済学科１年　王　奕琳
経済学科１年　ロ ウ　イ
経済学科１年　単　恩慧
経済学科１年　宋　嘉蕾
経済学科１年　ファム　ザー　フイ
経済学科１年　グエン　スアン　ソン
中国語学科２年　チャン　ティ　フォン　ブオイ
日本語学科４年　グエン　ティ　マイ
日本語学科１年　ソウ　羽セイ

都立田柄高校異文化交流会

日本語学科１年 ゴティ　ダイ　チャン
英米語学科４年
　　クエンカ　ダイアン　ニコル　バレンシア
英米語学科３年 ゾリヴォ　スァン　フォン
経済学科２年　リグトバータル ブヤナバダラハ
経済学科１年　ボルドスフ　ミシェール
経済学科１年　グェンティ　フォン　ホン
経済学科１年　ファム　ティ　フック
ＨＴ学科１年　チャン　トウイ　ミン　ヒエン

浦安市小学校英語支援

英米語学科４年　池内　夏美
英米語学科４年　小川翔太郎
英米語学科４年　小川　悠真
英米語学科４年　高木　由紀
英米語学科４年　冨樫美智雄
英米語学科４年　仲田　未羽
英米語学科４年　森岡　凜
英米語学科４年　安田　結貴
英米語学科４年　吉澤　阿門
英米語学科３年　小松　由芙
英米語学科３年　霜方　柚奈
英米語学科３年　知念　咲花
英米語学科３年　花澤　真彩

浦安市小中学校校務支援

日本語学科２年　今津　翔

浦安市未来塾

日本語学科３年　江尻　智佳
日本語学科３年　小林　采和
英米語学科４年　喜多　巧祐
英米語学科４年　仲田　未羽
英米語学科４年　布施　名菜
英米語学科４年　渡辺　もも

浦安市明海小児童育成クラブ

日本語学科３年　瓜田　謙心
日本語学科３年　早乙女　愛菜
日本語学科３年　比嘉　彩夏
日本語学科３年　三島　茉姫
日本語学科２年　實木原　和心

英語部活動支援（江戸川区立篠崎中学校）

英米語学科４年　小川　翔太郎

英米語学科４年　吉澤　阿門

足立区民対象生涯学習講座(英語)

英米語学科４年　冨樫美智雄
英米語学科３年　霜方　柚奈
英米語学科３年　知念　咲花
英米語学科３年　花澤　真彩
英米語学科２年　嶋崎意住美

英語マスター講座成果発表会

英米語学科４年　高木　由紀
英米語学科４年　小川　翔太郎
英米語学科４年　池内　夏美
英米語学科３年　大沢　和心
英米語学科３年　大場　伊織
英米語学科３年　霜方　柚奈
英米語学科３年　知念　咲花
英米語学科３年　花澤　真彩
英米語学科２年　嶋崎意住美
英米語学科２年
シモマエ　サイリエル　ミー　ピニオン
英米語学科２年　和田　航英

校内寺子屋（葛西南高校）

英米語学科１年　阿部　未鈴
英米語学科１年　大西　萌衣
英米語学科１年　上原　慎平
英米語学科１年　佐藤　咲綺

明海大学・朝日大学共催
英語授業改革セミナー

英米語学科４年　池内　夏美
英米語学科４年　小川翔太郎
英米語学科４年　折笠　涉
英米語学科４年　喜多　功祐
英米語学科４年　高木　由紀
英米語学科４年　舘田　悠輝
英米語学科４年　田中　星来
英米語学科４年　冨樫美智雄
英米語学科４年　仲田　未羽
英米語学科４年　布施　名菜
英米語学科４年　古川　湖菜
英米語学科４年　安田　結貴
英米語学科４年　吉田　優奈
英米語学科４年　渡辺　渚稀
英米語学科３年　霜方　柚奈
英米語学科３年　知念　咲花
英米語学科３年　花澤　真彩

シンポジウム運営・配信・原稿執筆・デザイン・印刷・製本：株式会社トライ
〒113-0021 東京都文京区本駒込３－９－３